

## 試聴会・訪問記掲載

### 河口無線ハイファイディリティ試聴会報告(2016.2.6)

河口無線で開催されたテクニカルブレインの新製品のプリアンプ TBC-ZERO-EX2 の試聴会に行ってきました。

#### <使用機材>

以下のようなラインアップで計画され、試聴会が進行しました。



テクニカルブレイン フォノ入力付きプリアンプ TBC-Zero-EX2 ¥4,298,400



テクニカルブレイン モノラルパワーアンプ TBP-Zero-EX ¥5,850,000 (ペア)



ミッチェル アナログプレーヤー GyroDec-AL ¥496,800 (アームレス)



オルトフォン S字型トーンアーム AS-212S ¥162,000



B&W スピーカーシステム 802D3 ¥3,672,000 (ペア)

<試聴の経過>



当日のセッティング

最初に使用機材の説明があり、カートリッジは EMT TSD をシェルから出してリード線を半田付けしたもの、スピーカーは最近入荷したばかりの B&W 802D3 を使用すると説明がありました。また、今回のプリアンプはフォノイコライザー付きで、直流増幅のハイゲインのものにチャレンジしたとのことでした。トータルゲインが 120dB にもなるので安定化の確保がポイントのようです。

また、直流増幅、バランス伝送、介在する接点や素子を減らして全段直結を実現することが同社のアンプ開発の拘りだそうで、結果としてスピード感のある音の実現できており、SS 誌のグランプリを受賞できたのは、鳴らしにくいスピーカーを今までにない音で鳴らせるようになったことが評価されたとのことでした。

最初にジャズ、ついでオルガンと合唱の曲がかかりましたが、ジャズはな生々しく強調感のない自然な音であり、クラシックの方は透明感があって音の分離と協和のバランスの良さを感じました。

同社は修理から始めたとのこと、接点の劣化や振動の影響によるモジュレーションが如何に音に関わってくるかを痛感し、リレー接点を MOS SW に替えるとかの方策を取ってきたとのことでした。

ここで再びジャズとビゼーのカルメンがかかりましたが、ジャズの生々しさ、オーケストラの分離の良さは先程と同様でした。

フロアーから全段直結にすることのメリットや問題点について質問があり、逆起電力の問題回避のためにはトランスを入れる方法もあるが、NF をできるだけ小さく取ることとダンピングファクターを大きくすることで回避しているとのことでした。電源用にはノイズカットトランスを開発しており、実際に MHz オーダーのノイズを入れると 1KHz の信号の両脇にノイズが乗ってくることを確認し、その対策のためのトランスを開発しているとのことでした。

ここでエレキギターとジャズのフルバンドがかかり、ギターの鮮烈な音とフルバンドの分離の良さが確認できました。

ここまでの B&W のスピーカーをアヴァロン ダイヤモンドに替えて、先のジャズのフルバンドと別のジャズがかかりましたが、アヴァロンの個性の音になったのは当然としてもアンプのグリップ力はスピーカーを替えても変わりませんでした。

ここでボリュームの位置と音質との関係の話があり、一般には 9 時くらいの位置が多いのに、同社では 12 時~1 時の位置にしているとのことでした。抵抗値を上げてボリュームを絞るのは音質的には問題があり、理想的には 3 時~4 時の位置が良いのだが、不安感もあるので 2 時~1 時の位置を選んでいるとのことでした。また、保護回路もリレーでなく、大容量コンデンサーに溜めて放電する方式で非常に高速で働かせているとのことでした。

この後、チェロ、女声ボーカル、ピアノ伴奏のソプラノの歌曲、ジャズ、ウインナワルツなどが順次かけられていきましたが、音楽ジャンルの得手不得手がなく、いずれもナチュラルで生々しいところが共通していました。

#### <まとめ>

技術面での詳細な説明と適切な試聴を挟んだデモで、テクニカルブレインの開発方針とそのために採られた方策の妥当性が現実に音として現れていると感じました。

B&W のスピーカーについては、これまで気になっていた音域間の繋がり悪さや低域のぼやけた感じが払拭され、駆動力の良いアンプとの組み合わせで高いパフォーマンスを示す仕上がりとなっていることが分かりました。

電源のノイズの問題や振動による接点でのモジュレーションについては、このところインフラノイズのパワーリベラメンテ、タップリベラメンテ、フィルタライザーの効果や各種ケーブルの接続ポイントでの foQ シート貼り付けによる制振効果で実感していましたので、説明内容は参考になりました。

以上